

出産後の早期退院に関する実態

川原 直子¹, 神谷 摂子², 恵美須文枝²

Needs Related to Early Hospital Discharge after Giving Birth

Naoko Kawahara¹, Setsuko Kamiya², Fumie Emisu²

当院で出産する妊産婦の産後入院期間に対する意向を知るために、妊娠後期のマタニティクラス参加者114名に質問紙調査を行い、属性、退院後のサポート予想、希望する入院期間、入院中や退院後に受けたいケア、助産師の訪問希望等について回答を求めた。また、すでに退院した褥婦8名に、属性、早期退院の理由、退院後困ったことについて面接調査を行った。その結果、退院後のサポートは十分と答えた人が多かったが、不十分と回答した人は初産婦よりも経産婦が多かった。また、経産婦は初産婦よりも早期退院を希望する人が多く、その理由は上の子が心配なことや環境的に落ち着かないことが挙げられた。入院中に受けたいケアは初産婦では沐浴ができるようになりたいことをはじめ、すべてのケア項目にニーズが高く、経産婦では、母乳育児や母児の健康に対する判断ができるケアが求められていた。退院後の施設助産師の訪問については、初産婦の方が希望する人が多かった。

キーワード：産褥期、産褥、早期退院、退院、経産婦

I. はじめに

数年前まではほとんどなかったことであるが、近年本院では、出産後間もない時期の短期間入院で退院してゆく褥婦が散発するようになってきた。平成23年度は564名の出産数のうち早期退院者は37名(6.6%)で、1ヶ月平均3名いるという結果である。

海外では、出産後24時間以内、あるいは産褥1日目、2日目の退院が一般的である国々があることはよく知られている¹⁾が、保健医療体制の異なるこのような国々の実態を考慮しつつ、当院を利用する妊産婦の実情に即したより良いケアを検討することが必要になってきている。

我が国の褥婦の入院期間については、2009年に実施された勝川の全国調査²⁾によれば、経膈分娩の平均入院日数は5.6日であり、年間分娩数800件以上を取り扱う施設では、入院日数が少ない傾向にあると報告され、分娩が集中する周産期センターなどではベットコントロールのために早期退院を促進する状況が推測されている。

褥婦の入院期間の設定は、一般に早期新生児期をほぼ脱し、母体の健康回復の見通しが立てられる時期とみなされるが、核家族の増加や退院後に身近な支援者がいないための延長希望がある一方、上の子どもに対する心配や経済的事情から早期退院を希望する場合など、多様な社会的要因が入院期間の延長や短縮に影響していることが、当院の状況から推測できる。

以上のことから当院の早期退院の実情を把握し、当院を受診している妊産婦のニーズに対応するケアを再検討することが必要と考え、今回は、当院で出産する妊産婦の早期退院に対する実態を把握することとした。そこで、妊婦に対して入院期間に対する意向調査を行い、さらに早期退院をしていった褥婦に聞き取り調査を行うこととした。

II. 用語の定義

本研究で用いる用語を以下のように定義した。

「早期退院」とは、当院で目安としている産後5日目ま

¹春日井市民病院, ²愛知県立看護学部 (ウィメンズヘルス, 助産学)

で入院せずに、産後4日目までに退院する場合とする。

III. 研究方法

妊婦では、次のような調査を行った。妊娠30週以降に実施する当院の後期マタニティクラスに参加した妊婦を対象に、年齢、初経産別、家族人数等や退院後のサポート、希望の入院期間、生後5日目の新生児検査に対する再来事情、入院中に受たいケア、退院後に受たいケア、出産施設の助産師による退院後の訪問について、自記式質問紙の回答を求めた。

さらに、平成23年10月～平成24年6月の間に母児共に早期退院をした経膈分娩褥婦のうち、外国人を除く出産後2ヶ月～6ヶ月を経過した褥婦12名にインタビュー調査の協力を依頼し、了解の得られた8名に面接または電話でのインタビュー調査を行った。インタビューは、30分～60分程度として、退院後の母親の身体回復状況と経過、新生児の身体的状況・経過・栄養法、夫その他の家族のサポート状況とその内容、退院後に困ったことと解決方法、家族以外のサポート内容・提供者・情報源、今後に向けての心配事などについて話してもらった。インタビュー内容は、協力者の許可があればICレコーダーに録音し、それを逐語録に起こして、その内容を研究目的に沿って、確実性・妥当性を研究者間で確認しながら整理した。

IV. 倫理的配慮

研究協力者には、質問紙調査および面接調査とも書面及び口頭で研究目的・方法を説明し、協力の可否については自由意志を尊重して、断った場合でも診療や看護ケアの提供に関係ないことを誓約した。質問紙は、クラス会場に設置する回収ボックスを用いて、回答の有無を他者が干渉しない方法で回収した。面接調査では同意書に署名をもらい、インタビュー実施時にも再度確認を行ったうえで実施した。研究によって開示された個人情報、研究目的以外には使用せず、研究経過中も漏えいがないよう連結可能な匿名化によるデータの取り扱いとした。なお、本研究は、春日井市民病院の倫理審査委員会において承認された研究計画書に基づいて行った。(承認NO128)

V. 結果

1. 妊婦に対する調査結果

当院で平成24年6月～9月に実施した、後期マタニティクラスに参加した妊婦120名を対象に調査用紙を配布し、そのうち116名から回答が得られた(回収率96.7%)。このうちの有効回答は114名であった。

対象者の年齢(図1)は、10代1名(1%)、20代38名(33%)、30代68名(60%)、40代6名(6%)、無回答1名であった。初経産別は、初産婦59名(52%)、経産婦55名(48%)で、また、家族形態は、97名(85%)が核家族で、17名(15%)が複合家族であった。

産後における退院後のサポート体制(図2)については、「十分である」、「おそらく十分である」と9割の妊婦が回答したが、初産婦では2名、経産婦では9名が「不十分である」と回答し、経産婦の方がサポート体制に不十分さを感じている人が多かった。

産後の希望入院日数(図3)は、現行の6日間(分娩日を含む)が、初産婦47名、経産婦39名と共に最も多く、その理由は「育児や体調の回復にちょうど良い期間だと

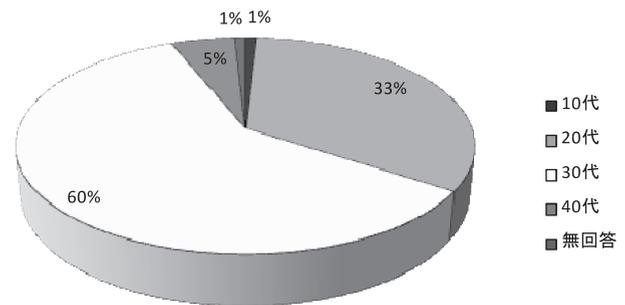


図1 対象者の年齢 (n=114)

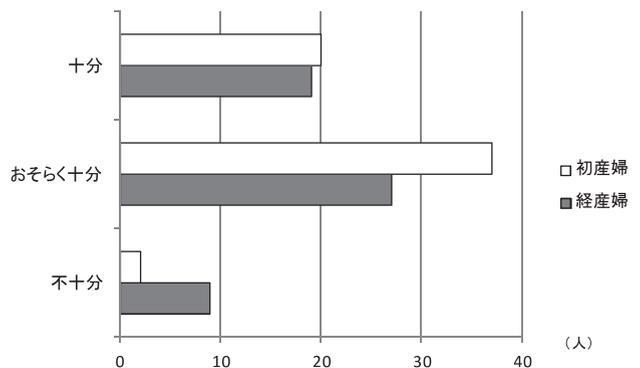


図2 産後の退院後サポート (n=114)

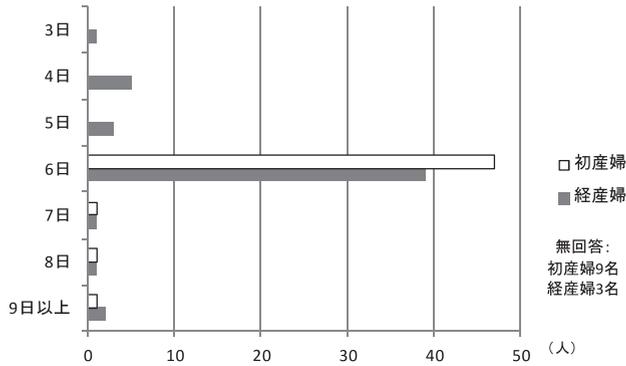


図3 産後の希望入院日数 (n=114)

思うから」、「病院で決められた期間だから」、「不安が解消するにはこれくらいの期間が必要」と回答していた。なかでも経産婦は、「上の子の分娩の時ちょうど良かったから」、「上の子がいるからこれ以上は心配」と、また初産婦では「初めてで適当な日数がわからない」との理由から現行通りの日数を希望している妊婦が多かった。

また、7日以上入院を希望した初産婦3名は、「産後の不安がある」、「不安をできるだけ解消して退院したい」と述べ、経産婦の4名は、「退院後のサポートがない」、「家に帰るとゆっくりできない」がその理由であった。

現行より早く退院したいと回答したのは経産婦のみの9名で、初産婦はいなかった。経産婦の理由は、「上の子が心配」が最も多く、その他、「自由になりたい」、「前回は早めの退院で問題なかった」であった。また、退院後の産褥5日目に新生児の検査で再度来院することについて、早期退院を希望した9名中の5名は「問題ない」と答え、3名が再度の来院は「大変である」と答えていた。

産後の入院中に受けたいケア(図4)の複数回答では、初産婦は「児を自分で沐浴できるようになりたい」が47名、「児の健康状態の判断ができるようになりたい」は46名、「母乳育児に自信が持てるようになりたい」が44名の順に多く、初産婦の半数以上が全項目について、受けたいケアとして希望していた。その他には「赤ちゃんのおむつのかえ方」、「乳房トラブルの対象方法」などの希望があった。

経産婦が受けたいケアの希望は、「母乳育児に自信が持てるようになりたい」が33名、「自分の健康状態の判断ができるようになりたい」が26名、「児の健康状態の判断ができるようになりたい」が25名の順に多く、初産婦で最も多かった「児を自分で沐浴できるようになりたい」については、経産婦では最も少なかった。その他には、

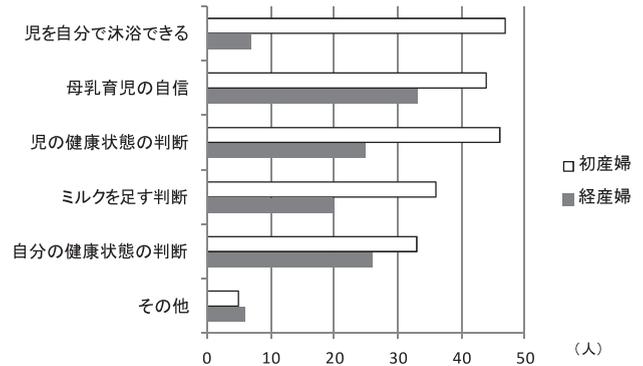


図4 産後入院中に受けたいケア (複数回答)

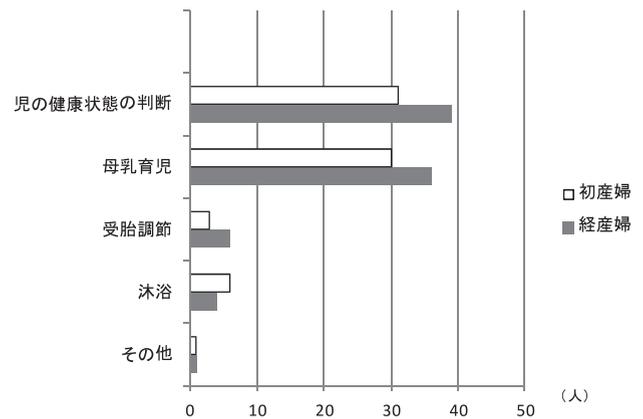


図5 退院後も受けたいケア (複数回答)

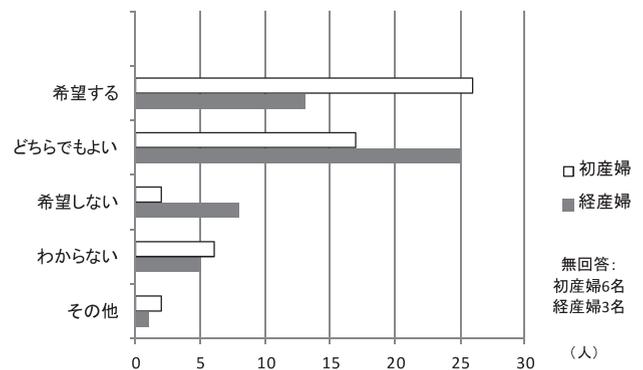


図6 出産施設の助産師による退院後の家庭訪問の希望 (n=114)

「母乳マッサージを受けたい」という希望があった。

退院後も受けたいケア(図5)については、初産婦、経産婦とも「児の健康状態の判断」と「母乳育児」についての項目が非常に多く、受胎調節や沐浴のニーズは少ない結果であった。

退院後に、出産施設の助産師による家庭訪問を希望するか否か(図6)に対し、初産婦、経産婦とも「希望す

る」という回答が「希望しない」を上回っており、初産婦の方が出産施設の助産師による訪問を希望する人が多かった。また、「希望しない」は経産婦に多く、初産婦では「わからない」という回答も多かった。

2. 面接調査の結果

研究協力者の概要を表1に示した。8名のうちC氏は、産褥1日目に退院していたが、その他は産褥2日目退院が1名、産褥3日目退院が2名、産褥4日目退院が4名であった。8名の年齢は20歳代前半から40歳代に及んでいた。初経産の内訳は、初産婦は1名のみであり、1回経産から4回経産婦までの7名であった。事例GとEは夫婦以外の大人の同居者がいる複合家族であったが、他の5例はすべて核家族であった。そのうち事例Dは、退院後の支援者が夫以外にないという4回目の経産婦（同居の子どもは5歳と2歳の2名）であった。その他の7名は実父母や義父母の支援を得られる状況での早期退院であった。

退院後の経過では、8名中の2例が黄疸で再び新生児が入院しており、事例Cは退院後も休息が十分に取れな

かったと述べた。児の栄養法は、母乳栄養が4名、混合栄養2名、人工栄養が2名であった。

各事例から述べられた早期退院の理由を表2に示した。7名の経産婦のうちの5名は、上の子に関する心配や気がかりを早期退院の理由の一つとして述べていた。それらの具体的な内容は、「上の子2人が小さいので気になって、最初から決めていました。主人にはその時は休めるように3日間は確保してもらって……」（D氏）や、「傷とかもあったのでやっぱりすぐに相談できたりするのは病院に居た方がいいかなとは思ったんですけど……お兄ちゃん（3歳）のことだけです」（E氏）と、自分の体よりも上の子どもの気がかりで早期退院をやむを得ずする結果になったことが述べられた。

それ以外の理由は、病院環境に馴染めないことの理由で、落ち着かないことや眠れないことが述べられた。

初産婦のB氏は自宅が病院に近く、何かあればすぐに病院に来ることができること、また、妊娠初期に子宮外妊娠の疑いで10日間の入院を経験し、それが嫌だったことから、「大部屋でした。でも、病院の個室は怖いし、だったら自分の部屋で寝たいなと思って」と早期退院の理由

表1 面接事例の概要

事例	年齢	初経産	家族形態	主な支援者	実際の退院日 (産褥日数)	希望退院日	退院後の経過	児の 栄養法
A	30代	3回経産	核家族	実母	3日目	3日目	5日目に黄疸で児入院	母乳
B	20代	初産	核家族	実母・祖母	4日目	3日目	5日目に黄疸で児入院	混合
C	20代	2回経産	核家族	実母	1日目	1日目	休息が十分にとれなかった	混合
D	40代	4回経産 ^{*1}	核家族	夫	4日目	3日目	特に問題なし	母乳
E	20代	1回経産	複合家族	義父母	4日目	4日目	児が尿路感染症で近医入院	母乳
F	40代	1回経産	核家族	実母	4日目	3日目	特に問題なし	人工
G	30代	3回経産 ^{*2}	複合家族	義父母	2日目	1日目	特に問題なし	人工
H	30代	2回経産	核家族	実母	4日目	3日目	特に問題なし	母乳

*1 第1子19才・第2子17才は別居 *2 第1子11才は別居

表2 早期退院の理由

事例	退院日	初経産	早期退院の理由
A	3日目	3回経産	入院中は第1子が実家から通学していたので、不便であり、退院後は実母が手伝いに来てくれるので、子ども（上の子）にもいいし、自分も自由にできる。
B	3日目	初産	妊娠が発覚したときに子宮外妊娠と言われて、10日間ぐらいい入院したがそれが嫌で苦痛だった。自宅も歩いて病院から3分の所にある。
C	1日目	2回経産	基本的に病院が好きではない。病院は生活しづらい。家が落ち着く。
D	4日目	4回経産	サポートは夫のみ。上の子2人が小さい（5歳と2歳）ので、妊娠中から気になって、最初から（早く退院することを）決めていた。夫がその時は休めるよう3日間は確保していた。
E	4日目	1回経産	乳頭に傷もあり、すぐに相談出来るので病院にいた方がいいとは思ったが、3歳の第1子を実家に預けておりグズって大変だったため。
F	4日目	1回経産	上の子のため。上の子のときに退院が2日目だったので、どうにかなるだろうと思った（第1子米国で出産）。
G	2日目	3回経産	落ち着かない。病院に慣れない。みんな家族も仕事があり、長期に自分がいないと困ると思った。上の子も小さい（2歳）
H	4日目	2回経産	自分が体力的に元気。出産は三人目で比較的軽かった。入院期間が短い方が経済的に楽。

について述べていた。また、Fさんは第1子をアメリカで出産して、1日目退院を経験しており、「異国の地でも大丈夫だったから」と、4日目に退院していた。以上の2人は、過去の経験が、早く退院することの動機になっていた。

また、経済的な理由も述べられ、「体力的に元気だったし、出産は3人目で比較的にかかったし、(入院期間が)短い方が経済的に楽かな」「実家だったのでここ(病院)と条件が変わらずに食事も作ってくれ、家のこともやらなくてよく、母が全部やってくれました」(H氏)と、実家のサポートによって、入院と同じ状況で生活できる条件を確保して、早期退院を実施したことが述べられた。

また、D氏は初産婦ならば早期退院をしないことを、「早く帰っても聞く人もいないし、わからないことも多いだろうし、おっぱいもそう出ないでしょ。入院しているといろいろ聞けるし……早く帰ってもわからない」と述べ、経産婦であることが、早く帰っても心配ない理由と考えていた。

退院後の母親の身体回復状況は、8名中の7名は自覚する異常はなかったが、C氏だけは「きつかったですよ。寝とれなかったし……でもお母さんも妹もおったし、何とかかなりましたね。入院しとくよりいいし」と、退院後の自宅での休養が十分に取れにくかったことが述べられた。

新生児の身体的状況・経過については、8名中の5名は問題なく、2名の児は、5日目に黄疸の光線療法のために入院していた。A氏は、「黄疸で、5日目の検査に来て、そのまま入院しちゃったんですよ。2泊3日で入院しちゃって……。もう母乳絞って運んで……。だから、それは私は普通に入院していれば、5日目の入院検査で

もっと前に黄疸がわかってたから、何か、それは赤ちゃんが可哀そうだったかなと思う」と述べた。B氏も同様の気持ちを述べていた。さらに他の1名が、児の尿路感染で近医に入院していた。

退院後の困ったことについては表3に示した。8名中の4名は特に困ったことはなかった。しかし、B氏は、「病院にいた分、やっぱり看護婦さんがいろいろ助けてくれたので、それがプツリなくなったので、何をしたらいいかわからない。ちょっと不安だった。」と述べ、D氏は、「おっぱいかな。足りているかどうかわからない感じですね」と述べ、E氏もまた「初めての母乳育児(代1子はほぼ人工栄養)だったので、なかなか最初からはそう出ないじゃないですか。だからその辺はちょっと退院してから心配で、おっぱい外来行こうか迷ったんですけど、だんだん出てきたみたいですごい増えたので。そこだけは、その当時はすごく心配でしたね」と述べた。

育児の中で困ったことについてA氏は、「(新生児が)昼間は寝れるんですけど、もう、みんな(上の子)が帰ってくるのと寝れないし。だからそういうのはかわいそうかな。でも鍛えられているな」と述べ、H氏は「上の子2人の時は、お臍の処置のキットをもらっていたけど、今回はなかった。家の消毒でいいと聞いていたが、不安になった」と述べた。

困った時の解決方法として、上の子が下の子どもに荒っぽい接し方をする場面では「駄目だよ、そういうことしたら痛いんだから」と、2歳5ヶ月で話が理解できることからひたすらに言い聞かせ、話してもきかない時は、「同じことするよ、という、絶対に嫌だというから……」(A氏)と述べていた。またD氏は、「上の子たちも手はかかるけど、上の子たちも下をみてくれますね」と

表3 早期退院後の困ったこと

事例	退院日	初経産	困ったこと	対処法やサポート等
A	3日目	3回経産	・上の子が児にちょっかい出したり、叩いたりして児が泣く。 ・上の子がいるとうるさくて下の子が寝られない。	・上の子供に言い聞かせた。 ・夫の買い物手伝い、実母が料理をしてくれた。
B	3日目	初産	・病院の中はいつも同じ温度だったので、外に出たときに子どもの服が全くわからなかった。	・実母に相談した。
C	1日目	2回経産	・5日目にみてもらうまで、黄疸が心配だった。	・児は元気だったのでそのまま様子を見た。
D	4日目	4回経産	・母乳が足りているかどうか心配 ・自分一人の時間がない。	・母乳マッサージに通った。 ・上の子が下の子を見てくれた。 ・夫の協力で自分の余裕を作った。
E	4日目	1回経産	・母乳が足りているかどうか心配	・おっぱい外来を考えたが、徐々に出るようになってきたので行かなかった。
F	4日目	1回経産	・特になし	・上の子が下の子の面倒を見てくれた。
G	2日目	3回経産	・特になし	
H	4日目	2回経産	・生まれた子供の臍処置が不安だった。	・姉にアドバイスしてもらった。

話し、F氏は、「上の子が面倒見よく……もともと年が離れているからだと思うんですけど、すごく楽しみにしていたので」と話した。

家族の主なサポートは実母が5名、義父母が2名（同居）、夫が1名であった。サポート内容では、「買い物の手伝いとか、主人もしてくれるし、お婆ちゃんも一緒について来てくれて、私が『これとこれを作ろうと思うんだけど』というとき、お婆ちゃんがそのまま作ってくれる。送迎時とか、どんどん寒くなる時期だったので、お婆ちゃんに来てもらって、ちょっとその間、みててね」、や「一番上のお姉ちゃんがいる時は、この子をお姉ちゃんにみてもらって、まだ寝ている時期だから、まあいいよという感じで」というA氏の語りに加えて、「ミルクだったので、出かけられるんですね。上の子の習い事の送り迎えとか、買い物も行ったりと、そういうの」というF氏の話もあった。

VI. 考 察

1. 希望する入院期間について

調査結果では、初産婦、経産婦とも現行の6日間が多かったが、その理由には、「育児や体調の回復にちょうど良い期間だと思うから」とあった。当院では一般的な入院期間（出産当日を0日目として5日目退院の6日間入院）を、分娩予定者に対して入院案内テキストで説明してあるため、多くの妊婦に納得されている結果といえる。経産婦の「上の子の分娩の時ちょうど良かったから」という回答に比し、初産婦の「病院で決められた期間だから」という答えは、経験のない初産婦にとっては自然の回答であろう。前述のとおり、勝川の全国調査²⁾によれば、一般的な経産婦の平均入院日数は5.6日となっており、当院で出産予定の妊婦の希望に合致していた。

質問紙調査で早期退院の希望がある人は、経産婦のみであり、「前回早期退院したが問題なく経過したので」と、過去の経験から早期退院を希望している意見が多かった。また、7日以上入院期間を希望する場合は、初産婦の産後の何もかもが心配という状況や「不安をできるだけ解消して退院したい」という考えに加えて、経産婦でも入院中は上の子をみてもらえるが、自分が退院したらサポートがないので入院しておきたい、や入院中こそゆっくりしたいなど希望は様々であった。以上のことから妊婦が思う入院日数に対する希望とその理由を知ることができた。

面接調査では、8名中7名が経産婦であり、1名のみが初産婦であった。8名の退院日は産褥1日目から4日目であり、早期退院の理由として、7名の経産婦のうち5名は、上の子に関する心配や気がかりを大きな理由として述べていた。病院は環境的に落ち着かない、病院では眠れないことも挙げられた。初産婦は、前回の入院経験が嫌だったことと自宅が病院から近いことを理由にしていた。早期退院したことにより、上の子のそばにいられる、気持ちが落ち着く、眠れるなどがあり、早期退院したことを満足していることが伺えた。このことは、希望退院日が実際に退院した日より、もっと早い日で良かったとした面接者が5名、同日で良かったものが3名いたことから伺える。宮下の報告³⁾でも2日目、3日目を産む母親からは「上の子が心配だから早く退院したい」とあるが、早期退院者にも経産婦が多くを占めており、理由も同じであった。

加藤⁴⁾は、産後の早期退院の利点として、上の子と一緒にいられる、家庭でリラックスができる、病院環境のストレスがない、父親が協力的になる、子どもたちも喜んでいる、子どもも協力的である、いつでも自由に母乳をあげられる、をあげている。今回の結果でもこれらのことは同様であった。このような利点を生かし、経産婦の希望に沿った、退院後の生活を視野にいたれたケア提供が必要である。上記の宮下の報告⁴⁾では、母子ともに健康で自宅で家事を手伝ってくれる人がいることを条件に、入院期間を4日間に短縮し、退院後は開業助産師が自宅を2回訪問する地域助産師との連携活動が紹介されている。このようなフォローアップ体制の実現に向けて、今後の検討が必要である。

また、早期退院の欠点¹⁾としては、2回目の出産でも母乳が出るか出ないかの心配、自分の身体のことを不安、母乳が足りているかどうか心配、児の発育の心配がある。今回の面接調査でも母乳育児をしたいと思っている母親にとっては、それがまだ安定しない時期に退院してしまうことは、かなりの比重で気がかりになっていることがわかった。また、黄疸で生後5日目に新生児が入院したA氏とB氏は、早期退院で新生児の黄疸の発見や治療が遅れ、児が入院となったことを児がかわいそうだったと後悔する表現をしていた。黄疸については退院時のビリルビン値が正常値でその日に退院ができて、児の黄疸はその後に悪化し、再入院することもある。そのような事態に備えての事前の説明（児の観察について話しておくこと）が必要である。

母体に問題あった褥婦1名の理由は、休息が十分に取れなかったことであった。それでも、家族のサポートがあったので、早期退院で良かったと述べている。希望が叶ったことで、退院後に多少のトラブルがあってもそれは希望した退院だから受け入れていることがわかった。

他の7名は特に問題はなく、早期退院による母体の身体的トラブルはなかった。起こり得る異常や、受診の必要を判断するための目安を伝えることによって、産褥経過が正常であれば、早期退院の希望を実現していくことは可能といえよう。

2. 早期退院に向けての入院中のケア

調査結果では、初産婦はどの項目についても半数以上が入院中のケアを希望しており、受けたいケアの必要性の高さが伺える。中でも「児を自分で沐浴できるようにしたい」が、一番多い希望であったがこれは、技術を習得できれば自信が持てる項目であり、現在行っている沐浴指導のさらなる充実を考えてゆきたい。「児の健康状態の判断ができるようになりたい」が、それに次いで多く、新生児に接したことがない初妊婦にとっては、児の健康状態を自分で判断しなければならぬことは実に不安であろうし、しっかり習得して帰りたいことがわかった。様子を見て良いことなのか、受診が必要なかの判断を、さらにわかりやすく説明していく必要がある。

「母乳育児に自信が持てるようになりたい」も多くの回答があった。当院では、母乳の良さは妊娠中の助産外来でも説明しているため、母乳育児への関心の高さがこの結果にも反映されているといえる。

経産婦が受けたいケアの希望は、「母乳育児に自信が持てるようになりたい」がトップであり、先に述べたように、経産婦であっても母乳育児への関心の高さが伺える。面接調査の結果でも、民間の母乳マッサージに通った褥婦もいたことから、当院の母乳育児に関する考え方や方法を、もっと詳しく説明しなければならない。

また「自分の健康状態の判断ができるようになりたい」は、上の子のためにも自分が元気でいなければ、という気持ちの表れではないかと考える。お産は病気ではなく、自然なことではあるが、産後の母親の忙しさを経験しているため、自分の健康状態の把握が心配なのであろう。その他「児の健康状態の判断ができるようになりたい」という希望も多かった。「児を自分で沐浴できるようにしたい」は、初産婦は希望が最も多かったが経産婦で

は低いことがわかった。経産婦では、過去の経験が活かされている結果と考えられる。しかし、面接調査のH氏は経産婦であったが、説明を聞いていたにも関わらず臍処置に不安があったことから、初産婦、経産婦を問わず個々の児に応じて指導することが必要だと考える。

3. 早期退院の場合の退院後に必要なケア

調査研究の結果では、初産婦、経産婦とも「児の健康状態の判断」と「母乳育児」についての項目が非常に希望者が多かった。このことに関しては、入院中と違い、退院後は聞きたい時にすぐ聞ける環境ではないためであると考えられる。沐浴のニーズが少ない結果であったことに関しては、すでに入院中に習得しておく項目のためであろう。受胎調節の項目も低かったが、これは出産直後の褥婦にとっては、優先順位の低いテーマと考えられているか、もしくは、避妊知識の浸透のためといえるか、今回の回答からはわからない。

退院後に、出産施設の助産師による家庭訪問を希望するか否かに対する回答結果では、初産婦、経産婦とも「希望する」という回答が「希望しない」より多く、「どちらでもよい」の回答を加えると、さらに大きく上回ることになる。このことから、訪問のニーズがないわけではないことがわかる。しかし、中には初産婦、経産婦共に「希望しない」という人もいることから、個別の希望に沿った対応が必要である。一般に、施設で出産し退院した母親にとって、育児不安が最も強い時期は退院後1～2週間といわれており^{4)~8)}、この時期に備えた訪問という支援ニーズは高いことが示されている。坂梨らによると⁴⁾、専門家による産後支援体制があれば、産褥3日目の退院は可能であると述べている。当院でも、助産師が訪問でき、母子共に医師による診察結果が退院日時点で異常がなければ、産褥3日目の退院は可能だと考える。これは今後の検討事項ではあるが、訪問の時期は退院後7～10日がベストであろう。そうすれば、入院中の状況に沿ったケアの継続が可能であり、褥婦にとっては妊娠・分娩・産褥と一貫したケアの提供を実現できることとなる。それは例え、入院期間を長く必要とする褥婦にとっても、より安心をもたらすケアになることが確実であると考えられる。

VII. おわりに

研究結果から、早期退院の実情について多様なニーズ

の存在とこれまでよりもそれぞれに対応できるきめ細かな退院指導や退院後の訪問支援が求められていることが明らかとなった。今後のケアの質を高めるために、具体的な対応について早急の検討が求められる。このような内容を考慮した退院時の指導や、退院後の訪問支援等、当院ではどのようにしたら、妊産婦のニーズに沿った支援を実現できるかが、今後の検討課題である。

謝 辞

本研究を行うにあたり、快くアンケート調査にご協力いただいた妊婦の皆様、早期退院をされ、インタビューにご協力いただいた出産後のお母さま方に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 加藤尚美：産後の早期退院への支援を行なうために。助産雑誌, 64(4) : 296-301, 2010.
- 2) 勝川由美, 坂梨薫, 臼井雅美, 小林美咲：産褥入院の現状と入院期間短縮化の条件—全国調査の結果から—。助産雑誌, 64(4) : 302-306, 2010.
- 3) 宮下美代子, 弘末睦子, 畑澤健一：産褥早期退院支援の取り組み。助産雑誌, 63(7) : 612-620, 2009.
- 4) 坂梨薫：産後早期退院の可能性と助産師の役割—産後ケア施設の拡充を視野にいれて—。助産雑誌, 64(4) : 307-312, 2010.
- 5) 服部祥子, 服部正文：乳幼児の心身発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点。名古屋大学出版会, 1991.
- 6) 島田三恵子他：産後1ヶ月の母子の心配事と子育て支援のニーズに関する全国調査—初経産別, 職業の有無による検討。小児保健研究, 60(5) : 671-679, 2001.
- 7) 片岡千雅子他：妊娠・分娩・産褥期における婦人の気分・感情状態の経時的変化—POMSを用いた質問紙による把握。母性衛生41(1) : 85-94, 2000.
- 8) 岡本ひとみ他：退院後1ヶ月検診までの褥婦の不安の内容と時期。日本看護学会集録 第31回母性看護, 26-28, 2000.